
アーユルヴェーダ研究

第 0 号

1970・MAY

アーユルヴェーダ研究準備会

チャラカ・サンヒターについて

大阪大学文学部インド哲学研究科 板倉裕之

インド医学 *Āyurveda* の流れにあって、*Carakā-saṃhitā* (A.D. 1世紀～2世紀頃成立) は最初に医学の全分野にわたってまとめられた医学書です。すでにインド医学に関することは *R̥gveda* (B.C. 13世紀頃成立) や *Atharvaveda* (B.C. 10世紀頃成立) にも散見されますが、この書において初めて後世に伝えられるように体系化されたのです。この書は医学者 *Ātreya* (B.C. 15世紀頃の人?) が伝授したのを *Agniveśa* が叙述し、*Carakā* (A.D. 1世紀頃の人?) が改篇、(I. 1～VI. 13の79章)、後に *Draṇabala* (A.D. 8世紀頃の人) が補充 (VI. 14～VIII. 12の41章) したものとされています。その全体の構成は次のように8篇120章よりなっています。

第I篇 総論(30章)、 第II篇 病理篇(8章)、
第III篇 診断篇(8章)、 第IV篇 身体篇(8章)、
第V篇 感官篇(12章)、 第VI篇 治療篇(30章)、
第VII篇 毒物篇(12章)、 第VIII篇 成就篇(12章)

この当時ないしは少し後には *Bhela-saṃhitā*, *Kāśyapa-saṃhitā*, *Suśruta-saṃhitā* などの医学書が成立していますが、*Carakā-saṃhitā* はそのなかでも特に内科に勝れたものとして高く評価されています。

ところで *Āyurveda* とは「生命科学」ということであり、それは生命 (*āyus*) の健全、不健全 (*hi taṣṭhi ta*) や健康、不健康 (*sukha-dukha*) の適否 (*māna*) を論ずる学問です。生命とは身体 (*śarīra*)、感官 (*indriya*)、精神 (*sattva*)、我 (*ātman*) の結合したものであり、これらの結合を乱すものが病気です。したがって病気は単に肉体的なもののみならず、精神的な病も含まれるのです。そして肉体的な病気は薬物療法により、精神的な病気は精神鍛錬によって治されることになっています。そのためにインド医学においては、一方では薬物学が非常に発達したと共に、他方ではヨーガ (*yoga*) などに見られるような高度な精神鍛錬の方法が発達しました。チャラカ・サンヒターもその例にもれず、薬物について詳細に論じながら、医学の資格や心得などを論じています。例えば医者のために論理学や道徳を述べた章もあるのです。このことはインド医学全般がそうであるように、チャラカ・サンヒターでも医学は広く人間性の問題として扱われていることを示すものです。だから人間とは何か、といったことから宗教、哲学に